

資料⑦(No.117 GMR E)

果梗部を鋭利な刃物で切り落とされ、さらに垂直に半裁されている果梗部片である。若干光沢の残る茶褐色の果皮をもっている。

径は 72.3mm で厚さは 21.8mm である。

外郭の角度、断面から観察できる維管束の角度からフクベまたはユウガオ型のヒョウタンといえる。

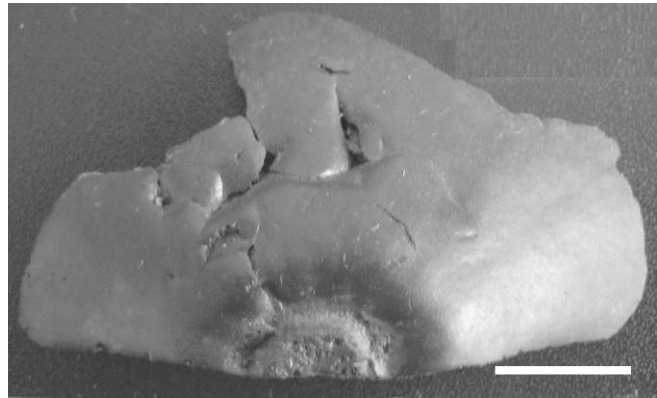


図 21a ヒョウタン果梗部上面



図 21b 断面

ヒョウタン果実片

漆塗り加工や完形が復原できうる 7 点の資料以外のヒョウタンの果実の産出は、全て胴部の破片であった。代表的なものを挙げる。

破片からでは形の復元はできないため、どのヒョウタンの品種かを特定することは難しいが、果皮の色や光沢が明らかに異なる破片があるため、今後検討を重ねたい。

果梗部が肉厚だったことに対して果皮は薄く、



図 22 ヒョウタン破片
(GMR no.35)



図 23 ヒョウタン破片
(GMR no39)



図 26 ヒョウタン破片
(GMR no.39)



図 27 ヒョウタン破片
(GMR no.56)

ヒョウタン種子

ヒョウタンの種子は葛梅里遺跡の植物遺体の中で最も多く出土した。A 区から F 区で確認され、その総数は 11475 個に及びその傾向を知るため、全て計測し、散布図にまとめた(表 8)

その結果、ヒョウタンの種子は共伴する果実の形態、種子の大きさからフクベまたはユウガオ型のヒョウタンのものである可能性が高いことがわかった。

現生のユウガオの果実に含まれる種子の数は 600 から 700 個で、一つの果実の中でも種子の大きさにはばらつきがみられ(表 9)、その中には変形種子や秕がみられる。葛梅里遺跡から出土したヒョウタンの種子の大きさも長さは 13mm 前後、幅は 6mm に平均値があり、現生のユウガオの種子より小さい。しかし、藤下のおこなった日本の遺跡出土のヒョウタン種子の計測結果では、時代が進むにつれ種子の大きさは大きくなっていくが、現生の栽培種よりも小さく、どちらかという野生種に近い大きさであるという(藤下 1995)。

葛梅里遺跡のヒョウタン種子には完形の種子だけでなく、側面が凹み変形した形状のものや、未発達の種子である秕(しいな)も含まれていたため、果実を割り、中の種子を割り貫いて廃棄したものが埋積していたと思われる。また、まとまった数で出土したのは D 区から F 区にかけての水路の下流域であったため、A 区～C 区から流されてきたものも少なくないはずである。しかし、D 区の no. 56 の 5455 個、F 区水溜りの 2051 個と大量にまとまって出土したところは、水の営力というよりは明らかに人が集積したものであるといえる。



図 28 ヒョウタン
種子 S=1mm

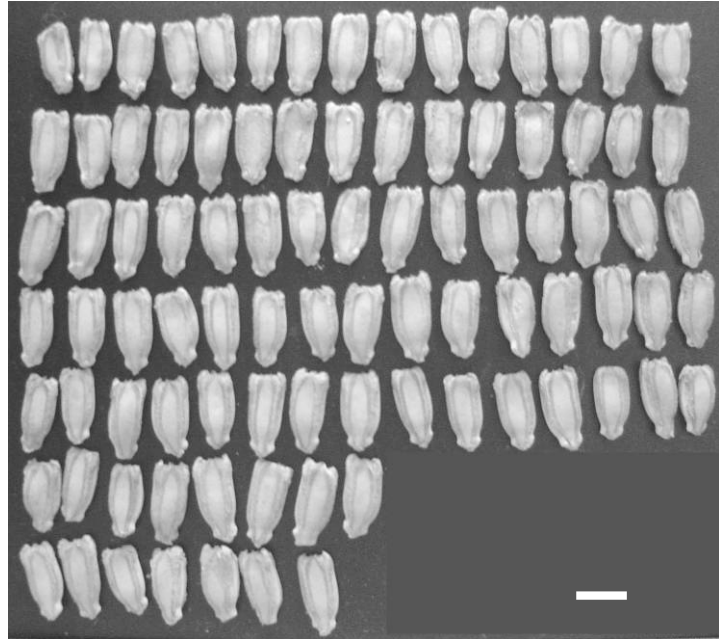


図 29 ヒョウタン種子 S=1mm



図 30 ヒョウタン種子(F 区穴) S=5cm

表 9 現生ユウガオの計測値(mm)／682 個

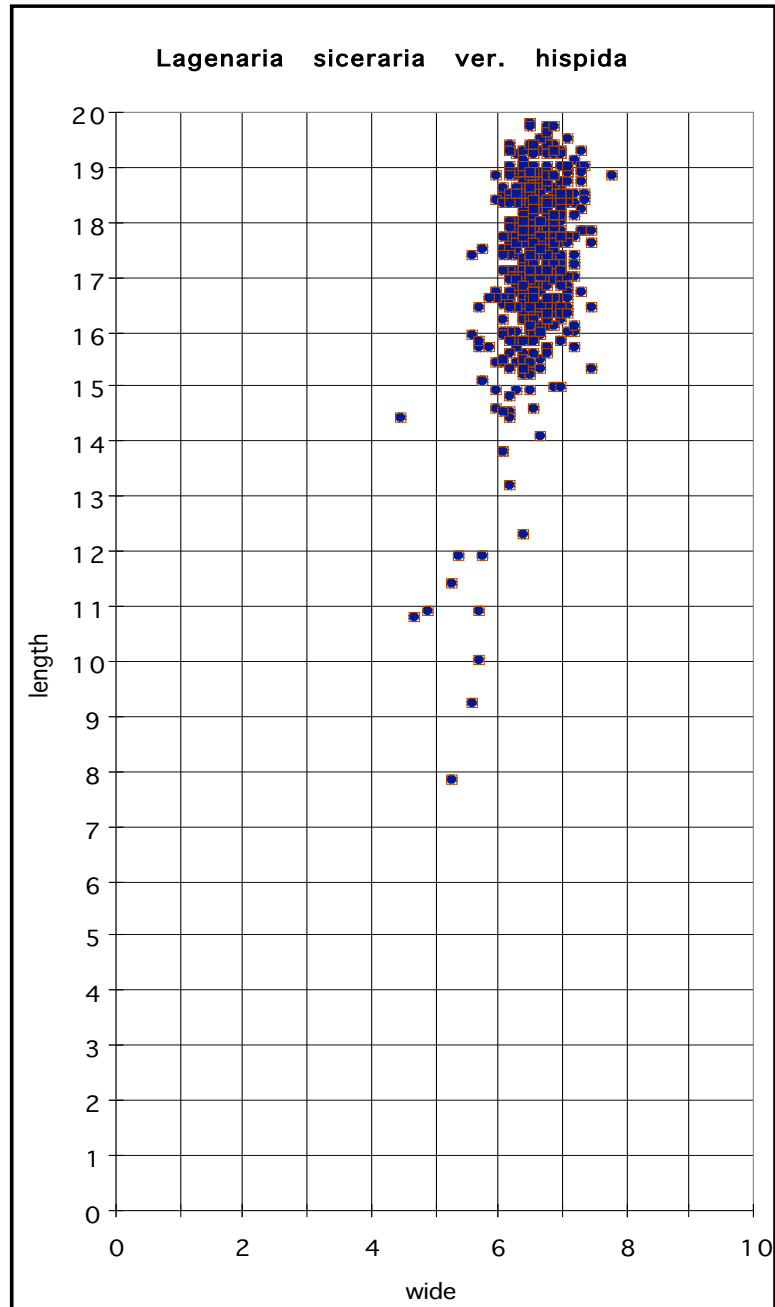
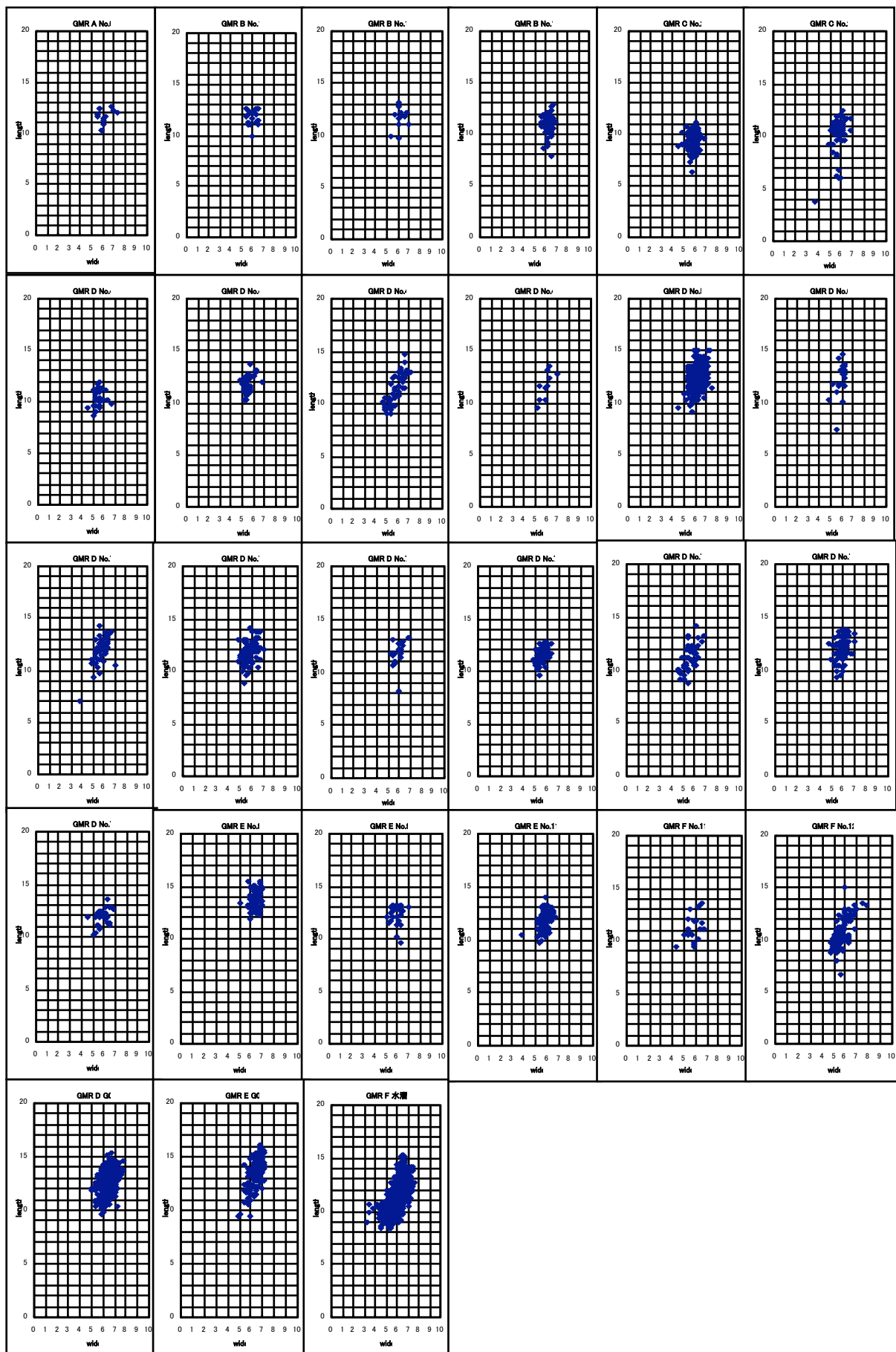


表8 ヒョウタン種子計測値



5-1-2. マンシュウグルミ *Juglans mandshrica*

マンシュウグルミはユーラシア大陸東部（中国～朝鮮半島にかけて）に分布する落葉広葉樹であり、内果皮(核)のなかの荏の部分を食べる。葛梅里遺跡からは多量の内果皮が産出した。

内果皮は非常に特徴的で、内側に隔壁があり、表面の中央の上下にかけて太い肋が走り、皴はオニグルミよりも深く多く刻まれている。



図 31a マンシュウグルミ (no.7 GMR B)



図 31b 内面

葛梅里遺跡のマンシュウグルミの内果皮の大きさは、頂部から臀部までが 30mm から 44mm と幅広く、幅は 20mm から 26mm、厚みは半裁状態のもので 11mm から 16mm 程度であった。大きさにはややばらつきがみられるが、形も狭卵形から卵形、丸形とばらつきがあった。

特に縦に半分に割れた内果皮が顕著であったが、自然に半分に割れたもの、人為的に叩き割られて半裁された打撃痕が確認できるもの(図 33)、半分に割れていてネズミなどのげっ歯類によってつけられた食害痕がみられるものといった産状であった。

モモにも同じような産状をした内果皮が見られたが、頂部の辺りを横から刃物で切断したと思われる内果皮もあった。

また、取り上げ試料としては、マンシュウグルミだけかもしくはモモと共伴している場合が多かった。



図 32 マンシュウグルミ内果皮

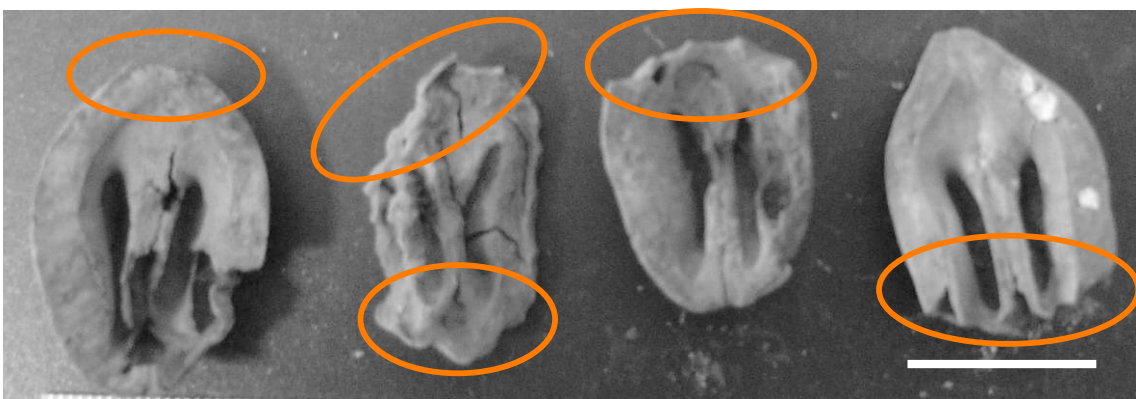


図.33 人による打撃の痕跡（オレンジの楕円部分）

5-1-3. モモ *Amygdalus persica*

モモは内果皮が産出した。後章で詳しく述べるが、モモは中国、朝鮮半島、日本での出土が確認されているが、特に日本では弥生時代以降古代にかけての遺跡から豊富に産出している。古代社会において内果皮は祭祀の際に利用したり、中の荳を食用または薬用にしていたりと重要な果樹であったとされている。

葛梅里遺跡から出土したモモの内果皮の大きさは表 10 をみると、縦が 20mm から 30mm で中には 12mm といった小さいサイズのものも含まれている。最大幅は 12mm から 23mm で厚さは完形のもので 12mm から 16mm 程度であった。金原の集成したモモ核の計測値と比較すると、日本の古墳時代のモモとサイズは同じくらいである。

完形の個体と、半分に割れているが欠損が見られない個体の縦と横幅を計測した。また、形のバリエーションも頂部が突出し細身で小さめの個体や少し尖っていて幅が広い個体、そして全く尖らず丸い形をした内果皮といった組成であった(図 34)。また、ネズミなどのげっ歯類による食害痕がみられることから、内果皮の状態で保存していたと思われる。

モモは完形が多かったことから果実も食し、内果皮の中の荳の部分も食していたと考えられる。その一方で図 35 と図 36 のように表面が炭化し砕けているモモもあった。完形の内果皮が最も多かった E 区では、打撃などの人為的な痕跡が確認できる個体も集中していた。また数は 3 個と少ないが、特異で目立った産状をしているものは、E 区と F 区から産出した完形の状態でも横から切断されている内果皮(図 37)であった。おそらく中の荳を取るためと思われるが、日本の遺跡から出土した類例もほとんどない。各エリアの割合は表 11 である。



図 35 表面が炭化しているモモ核(G 28)



図 36 表面が炭化しているモモ核(G35)



図 34 モモ内果皮（橙円が切断された内果皮）

表 10 葛梅里遺跡出土のモモ計測値 (mm)

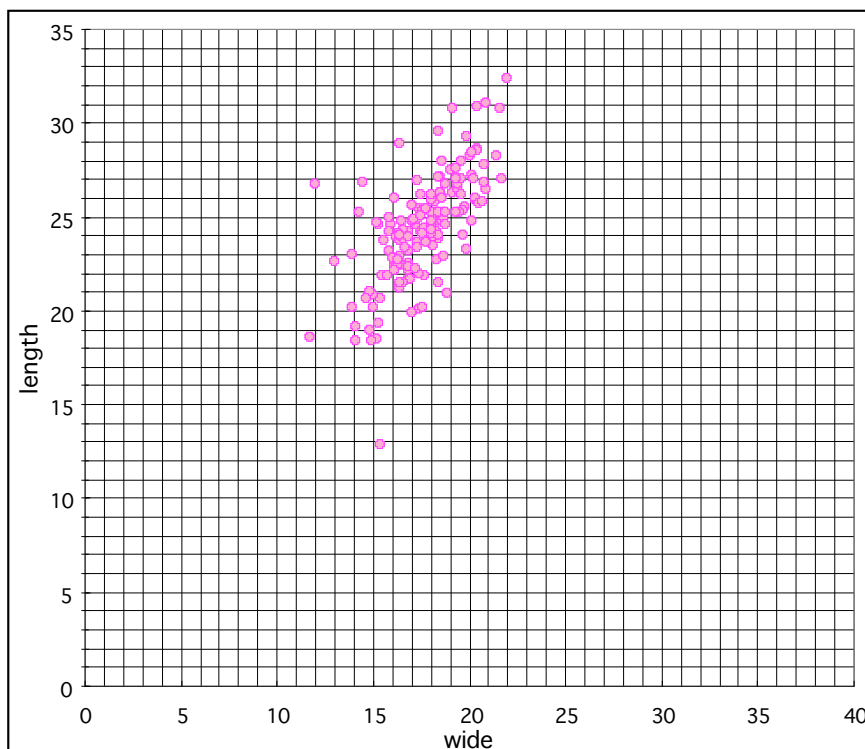
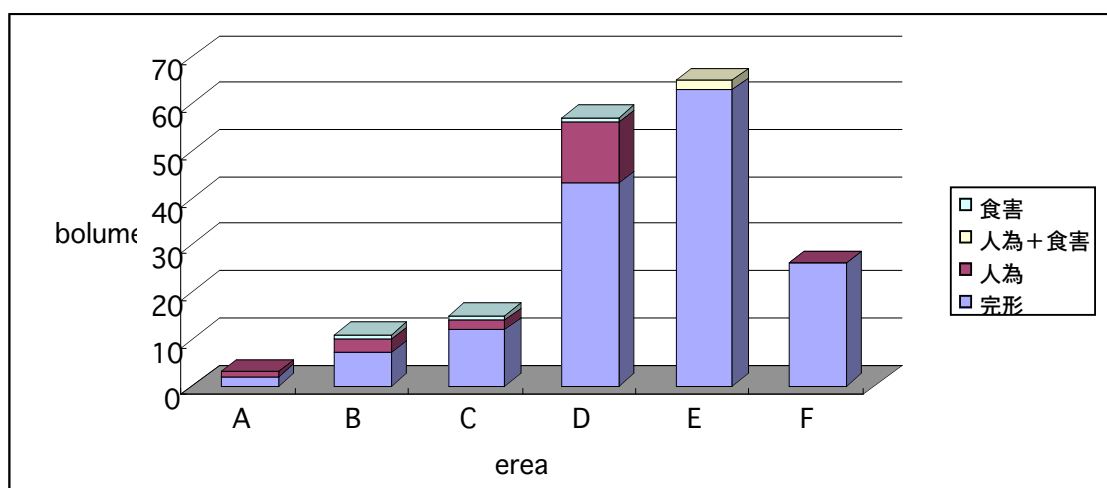


表 11 モモ内果皮の産状の割合



5-1-4. メロン種子 *Cucumis melo*. L.

ヒョウタンの種子と共に現地取り上げ試料と水洗選別試料中から多量に産出した。葛梅里遺跡から産出したメロンの種子のほとんどが現在でも広く食用とされるマクワウリか、ザッソウメロンタイプの種子が産出した。種子の大きさは 4mm から 9mm 程度で、明るい黄色か茶色、茶褐色である。表面の格子状模様が特徴的である。



図 35 メロン種子(S=1mm)

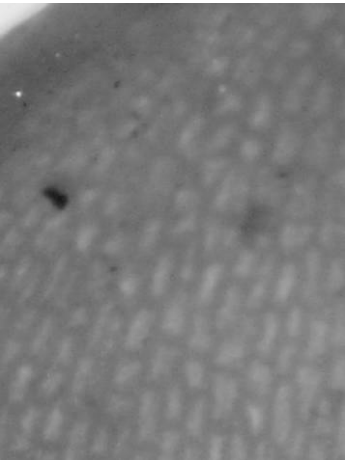
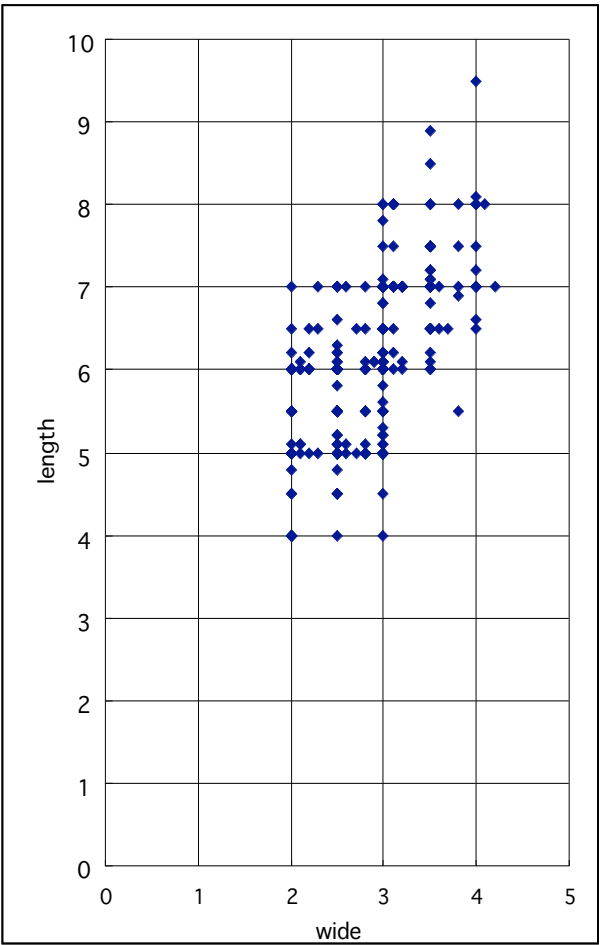


図 35b 表面拡大

表 12 葛梅里遺跡から出土したメロン種子のサイズ



5-1-5. クリ *Castanea crenata*

ほぼ完形の炭化子葉と果皮の破片が産出した。縦は 25mm 前後、幅は 28.8mm から 36.9mm までといったような大きなサイズであった。南木が行った日本の縄文時代遺構の遺跡から出土した野生グリと栽培グリの大きさの変異(図 36)をみると、葛梅里遺跡のクリは比較的大きいことがわかるが、栽培されていたか野生のものかどうかは断定できない。

また、炭化した剥き殻のような破片が多いため食用であったと考えられる。

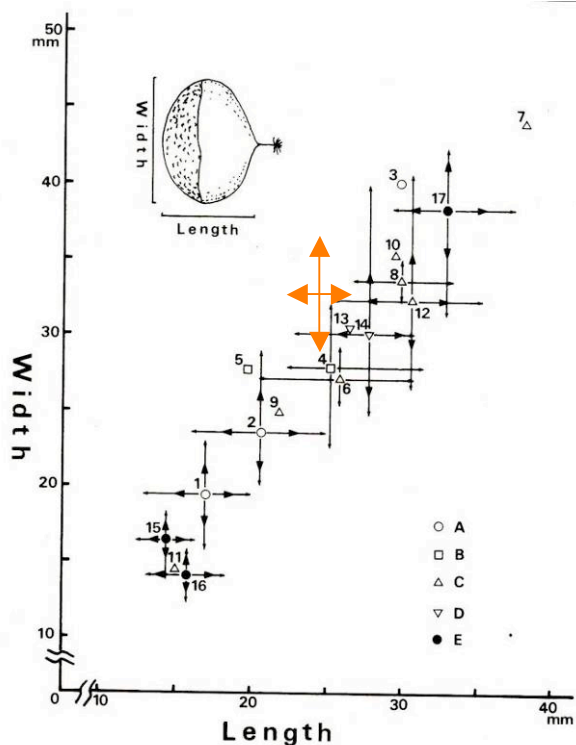


Fig. 24 Size variation of *Castanea crenata* fruits in fossil and modern specimens. Symbols "A" to "E" are placed on their mean value. Each symbol shows its age. A: Earliest to Early Jomon. B: Middle Jomon. C: Late to Latest Jomon. D: Yayoi and Kofun. E: Modern. Each numeral which is attached to the symbol shows its site number corresponding to table 1. Large arrows from the symbols show their standard deviations, and small arrows show their range.

図 36 クリの大きさの変異(南木 19)



図 37 クリ (GMR no.16) S=2cm

5-1-6. ハシバミ *Corylus heterophylla*

茶褐色で果皮の厚みがあり堅く、丸みを帯びた三角形をしている。炭化しているものもあった。大きさは幅が 11.6~15mm。

古くから食用として利用されてきたとされるナッツの一種である。ヨーロッパ産のセイヨウハシバミはヘーゼルナッツとよばれ、現在でも広く食されている。

葛梅里遺跡からは果皮が全て剥かれたように半裁されている状態で検出された。クリの果皮片と共伴して見つかったことから、食べかすであるといえる。

指で頂部から剥いたのか、頂部付近が欠けているものもある。



図 38 ハシバミ (GMR no.8) S=2cm

5-2. 水洗選別から得られた主な種実遺体群

ヤマグワ

長さ 1.5mm、幅 1.2mm の三角状で広倒卵形の核が産出した。
明るい茶褐色もしくは黄土色を呈し、基部に突起が見られる。(GMR D G22)



図 39 ヤマグワ核 (S=1mm)

サルナシ *Actinidia arguta*

側面観は円形で、丸い窪みが全面的にみられる。長さは 2.1mm、幅は 0.8mm。
暗褐色か炭化して黒色となっているものもみられた。



図 40 サルナシ (S=1mm)

イネ *Oryza sativa*

瘦果と穎付の炭化胚乳が炭化したものが産出した。炭化胚乳の穎付は長楕円形で長さ 6.5mm、幅 2.1mm で、不明瞭ではあるが、頂部縦に溝が走っており、穎の部分は表面に細かい筋と細突起が確認できる。また、瘦果は長さ 6.8mm、幅 2.5mm の長楕円で、頂部が突出している。(GMR D G 22)

葛梅里遺跡から出土したイネは、脱穀されていないイネと脱穀しているものでも穎が付着しているものが多かった。

また、遺跡からはイネ科の炭化した藁状の植物遺体も出土しており、脱穀されていないイネがそのまま火にくべられたと考えられる。

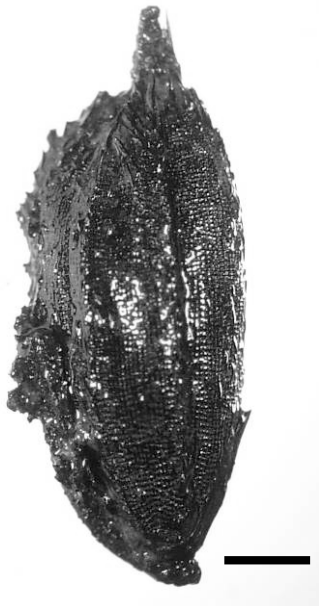


図 41 イネ瘦果 (S=1mm)



図 42 イネ穎付(S=1mm)



図 43 イネ (S=1cm)

マメ科 LEGUMINOCEAE

種子と炭化種子が稀に産出した。

基部の背面に太い肋が走り、側面観は半月状で細い縦溝が走る。
灰色を呈している。



図 44 マメ科種子 (S=1mm)

炭化種子の正面観、側面観ともに楕円形である。側面の種皮が破裂したように裂けていることが伺える。種子中央部に位置する細長い基部が確認できたため、マメ科と同定することができる。長さは 5mm で、幅は 3.2mm である。

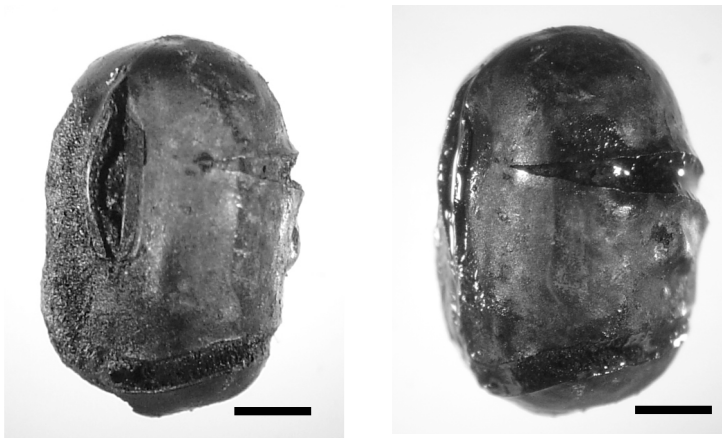


図 45 マメ科炭化種子 (S=1mm)

アサ *Cannabis sativa*

大麻。D 区のサンプルを中心に果実が産出した。ほぼ円形である。側面観は頂部から臀部にかけて細いはっきりとした筋が走り、網状組織も確認できる。直径は 3.4mm、径は 3.1mm。わずかに光沢があり、暗い茶褐色を呈している。(GMR D G22)



図 46 アサ種子 (S=1mm)

カナムグラ *Humulus japonicus*

果実が産出した。側面観は円形で、レンズ状の上面の基部に心形をもつ。直径が 3.4mm。表面には光沢がなく暗茶褐色か黒色を呈している。(GMR D G22)



図 47 カナムグラ果実 (S=1mm)

ブドウ属 *Vitis*.

長さは 4mm から 5mm 程度で幅が 3.5mm から 4.5mm といった幅のある倒心形をした種子と、長さが 5mm から 6mm で幅は 3mm の狭倒心形の種子が産出した。頂部は尖り、そこから縦に浅い筋が延びて中央にある楕円状のカラザを経て、下部に達する。暗茶褐色か黒色を呈しているが、中には炭化して黒色に光る種子もみられた。(GMR D G 20)

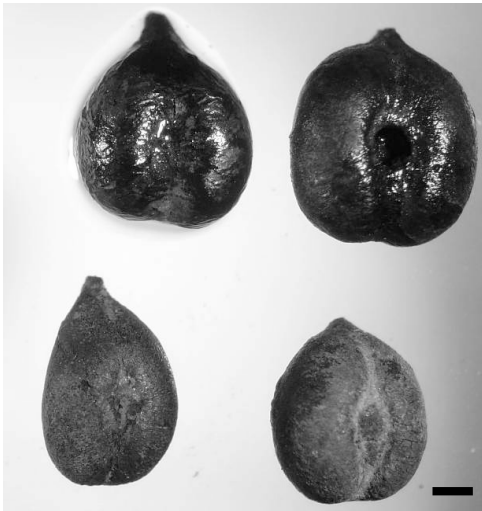


図 48 ブドウ属種子 (S=1mm)

キイチゴ属 *Rubus*.

核を特に D 区から多産した。半円状でやや心形をしており、長さ 2.3mm から 3mm、幅は 1.7mm から 2mm 前後である。明るい黄褐色を呈し、表面はクレータ状の深い網目となっている。(GMR D G 25)



図 49 キイチゴ属種子 (S=1mm)

6. 考察

本章では、葛梅里遺跡の種実遺体資料を通じて明らかになったこと、そこから推測される遺跡の性格を述べていく。その際には第2章4項で取り上げた遺跡の出土遺体と比較し、検討を行う。

6-1. 葛梅里遺跡の種実利用

葛梅里遺跡から出土した人が利用したと思われる種実遺体群の様相をみると、漆塗り加工のヒョウタンの果実片、ヒョウタンの果梗部、ヒョウタンの破片、大量のヒョウタンそしてメロンの種子、さらに人為的に割られたマンシュウグルミとモモの内果皮、人が剥いた破片であるクリ果皮やハシバミといったものである。

このうち、漆塗り加工のヒョウタンに関しては、容器片とみて間違いないが、ヒョウタンの果梗部片は容器を作るために切り落とされたのか、食べるために切り落とされたのかは定かでない。また、果梗部から復元される果実の形が器としても食用としても有用なユウガオタイプのものである可能性が高いことから、食用にしていたといえる。ただし、ヒョウタンの果実の胴部の細かい破片が多いことは果実を割って食べた食用を示唆し、また、大量の種子も果梗部を切り落とした後に胎座の部分ごと剥き抜いてそのまま破棄したものと考えられる。ヒョウタンの具体的な歴史や種類、利用法などは次項で取り上げるが、葛梅里遺跡のヒョウタン遺体の産状から、その場で加工し利用していたことがわかる。しかしながら、出土する種子の量に比べて果実の産出が少ないことは、胃袋に収まったということなのか、容器にして持ち去ったということなのかは、今後の類似する遺跡の調査報告を待って検討したい。

ヒョウタンの次に出土が顕著であったのが、モモとマンシュウグルミの内果皮である。両者とも自然に割れるか、打撃による半裁か、もしくは完形であった。モモは完形が最も多く、マンシュウグルミは打撃による半裁が最も多かつ

た。また、ネズミなどのげっ歯類による食害痕がみられることから、内果皮の状態で保存していたと思われる。モモは完形が多かったことから果実も食し、内果皮の中の荳の部分も食していたと考えられる。

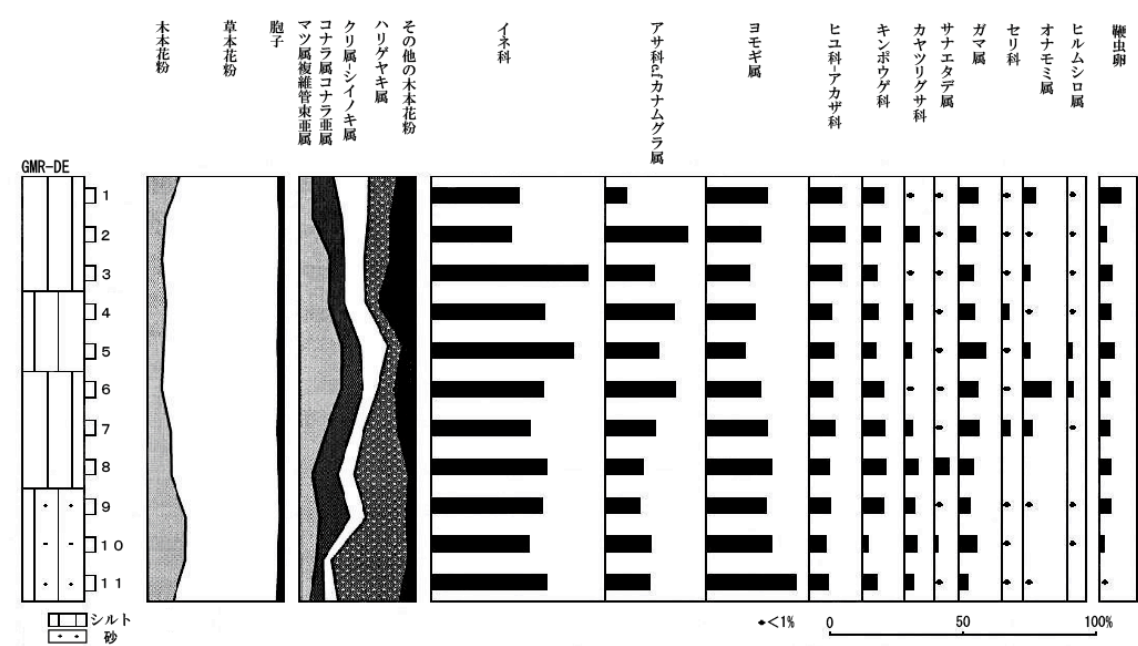
さらに目立っていたのはメロンの種子である。メロンはおそらくその形態からマクワウリタイプのメロンであると推察され、ある程度まとまって産出することからも、果実を食べて種子をそのまま破棄したといえる。マクワウリは現在の韓国でも初夏の果物として市場に並び、甘く多汁で美味なことからデザートとして日常的に食べられている。また、クリやハシバミといった堅果類も剥き殻の状態出土しているため、全体的に見て食べることへの利用が多かったように考えることができる。

ここまでの種実群の様相を伺うと、葛梅里遺跡は「食」を中心とした台所的な遺跡であるように思える。実際に掘立柱跡やピット群から「市場」ではなかったかという意見もでていた。しかし、土壌試料からより細かな種実遺体を観察した結果、これらの資料群の特殊性が浮き彫りになった。

表●の土壌試料の組成をみてもわかるように、ヒョウタンの種子やメロンの種子が顕著であり、その他はあまり多いとはいえない。特に栽培植物に焦点を絞ると、イネ、アサ、マメ科の種子が出土しているが微量である。イネも検出されているが、脱穀がされていなかったり、穎が残っていたりと、炭化しているが食に利用されていたとは思えないし、炭化した藁も多く見つかったことから脱穀せずそのまま火にくべていたかもしれない。また、コムギやオオムギなどの穀類が検出されなかったことは特徴的である。なぜなら、3世紀から5世紀というすでに社会基盤ができている時代背景、無文土器時代の新昌洞遺跡と比較しても、あまりに果菜類中心そして限定的な植物利用であることがわかる。

では、当時の遺跡の環境はどのようなものであったか。堆積環境からは、水路はよどんでいて衛生的な環境でなかったということがわかっている。また、安昭炫がおこなった花粉分析の結果からは、木本花粉が極端に少ないことから、遺跡のある氾濫低地帯には森林植生がほとんどみられなかったとされ、風媒花粉であるマツ属、コナラ属、クリ属ーシイノキ属、ハリゲヤキ属の花粉も高率で出現しないことから周辺域にすら森林がなかったと考えられている。一方

で、乾燥した場所で草原植生を形成する草本類は高率でみられた。また、鞭虫卵が確認できたことから人を含めた哺乳類の排泄物が溜まり、それらの活動が活発であったことが判明した。また、土壌を選別した際に検出された種実にもオナモミやカナムグラ等の雑草があった。



図● 葛梅里遺跡から産出した花粉化石の出現率ダイヤグラム(安・辻 印刷中)

特筆すべきは栽培植物であるアオイ属近似種、キュウリ属、ベニバナ属の産出である。キュウリ属は韓国に自生する野生のザッソウメロンか栽培メロンであるが、アオイ属近似種は栽培もしくは渡来、ベニバナ属も地中海沿岸からもたらされたとされる。外来種の花粉が発見されたということは交易などの可能性も考えられるが、産出記録が乏しいために断定するには時期尚早である。

以上のことから、葛梅里遺跡の環境は乾燥した荒地的な要素をもつ土地であり、水路の流れはよどみ、衛生的ではなかったといえる。この、衛生的ではなかった環境は、大量の動物骨にも起因している。葛梅里遺跡の動物遺体の同定をおこなった樋泉岳二によれば、動物遺体の組成は大半をウシやウマの下顎骨が占めていることから、その場で動物の頭を叩き割っていた可能性もあり、その偏った組成から、祭祀儀礼に使われたのではないかという。確かに、ヒョウ

タンやモモは祭祀植物としての伝承や祭祀具と共伴して出土した事例もある。それに葛梅里遺跡から出土した木器や土器には用途がわからないものもあった。これらを共通して祭祀遺跡と考えることもできるが、更埴条里遺跡・屋代遺跡群のように明確に祭祀具と位置づけられている資料がなく、可能性を示すに留まる。さらに、「市場」であるならば、出土する種実遺体がもっとバラエティに富んでいてもおかしくはない。

以上のように葛梅里遺跡の植物利用は、利用形態も産出した種実も限定的であったことがわかり、これに動物遺体、木材をあわせて遺跡の性格を考察すると以下のようなった。

「市場」や「祭祀遺跡」などのほかに考えられうる遺跡の性格は、「椿市」や「歌垣」といった男女の逢瀬を行うための場所という可能性である。その理由は、産出する種実遺体は夏から秋にかけて結実する植物であり、そういった季節性を考慮した場合、祭祀として最もポピュラーな春の豊作祈願ではないことがわかる。さらに豊作を祝つての祭祀ならば、イネの出土がもっと顕著であってもいいように思う。

「椿市」や「歌垣」は古代中国から東アジア、東南アジアの広い地域で行われ、日本でも万葉集にその様子が詠われている(渡辺, 1990)。しかしながら、古代の「市場」はいわゆる物々交換や商業施設としてだけでなく、「椿市」や「歌垣」の要素も併せ持っていたといわれており、葛梅里遺跡が祭祀遺跡とも市場とも判断が付きにくいのは、そういった複合施設であると考えることができるからである。

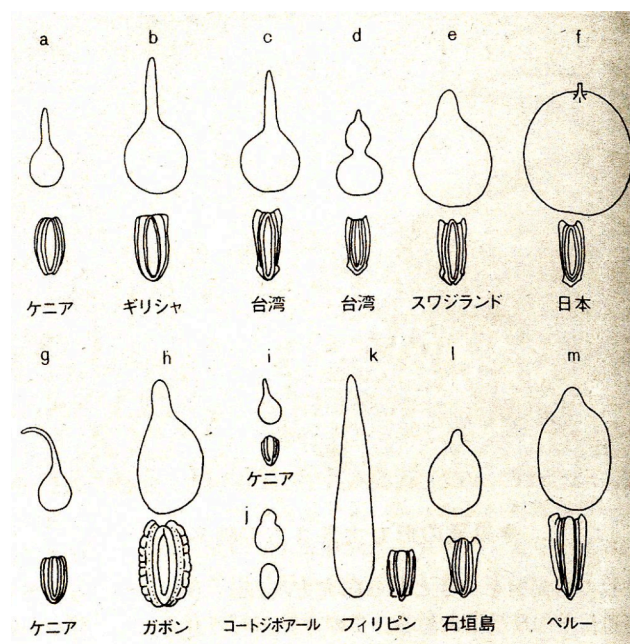
長屋王邸や更埴条里遺跡・屋代遺跡群の出土遺物と比べても種実の用途が漠然としており、不透明な部分が多い上に、韓国でのこの時代の比較資料が貧弱なため、現時点で遺跡の性格を断定することは難しい。

今後、韓国の資料の増加を待つて再検討をおこなうことと、日本の古代の遺跡との比較をおこなうことが課題となる。

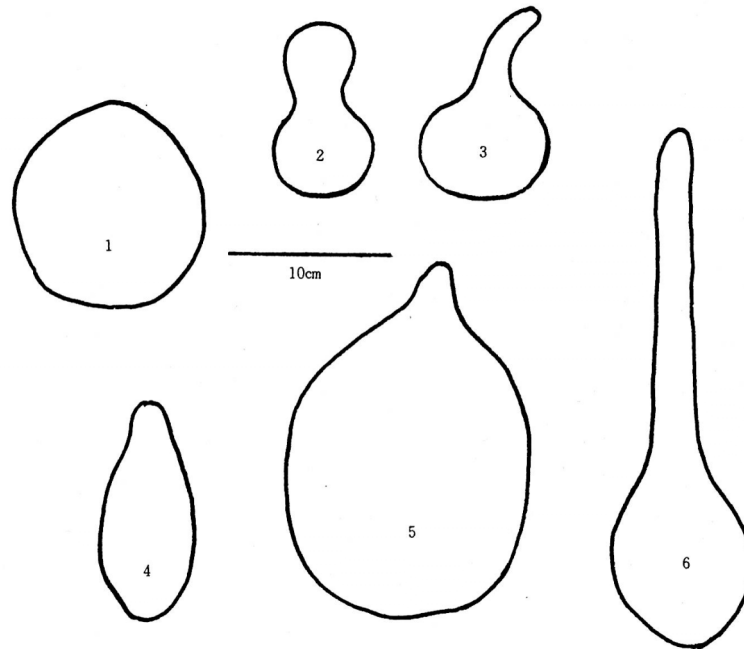
6-2. 古代植物文化における重要植物群

ヒョウタン *Lagenaria siceraria*

ヒョウタンは西アフリカ原産*の栽培植物で、現在でもアフリカや中国、韓国、日本、アンデス地方と世界各国で容器（水、酒、炭、花器、薬味入れ）、勺子、シタールなどの楽器、漁撈用の浮子、ペニスケース、コンパスなどの主に道具用として(藤下 1980)、または東南アジアから日本、韓国の広い地域では野菜と同じように味噌汁やカレーの具材として利用されている。日本の干瓢はユウガオの実をかつら剥きにして干したものである。一口にヒョウタンといっても、果実の形や大きさは様々で品種も色々である。また、大陸間では種子の形態が異なるが、近接地域だと果実の形が違っていても種子の形態は区別できない(図●)。それは藤下が指摘するように品種間で自由に交雑するためである。



図● 大陸間のヒョウタンの変異（湯浅 1979）



遺跡から出土したヒョウタン仲間の果実の形

1. 球型（利倉西） 2. ヒョウタン型（古留） 3. フラスコ型（山賀） 4. ナスビ型（境田） 5. ギボシ型（曾畑） 6. 首長フラスコ型（江上A） （ ）内は遺跡名 第1表参照

図● 日本の遺跡から出土したヒョウタン遺体（藤下 1995）

葛梅里遺跡のように大量のヒョウタンが出土した遺跡は日本でも韓国でも数例のみである。

韓国では新石器時代の細竹遺跡、日本では鳥浜貝塚で果実の一部が縄文時代早期、種子が縄文時代前期の層から出土した例が最も古い。韓国ではまだ発見例が少ないが、日本では縄文時代の遺跡に比べ、弥生時代から古代までの出土数は増え、前項で挙げた遺跡の出土遺物のように容器や勺などといった製品加工が施されたものが確認できる。

また、文献資料からも江戸時代までのヒョウタンの利用の様子を知ることができる。平安時代の新撰字鏡には飲器として利用する記述がみられ、続く倭名類●抄には「杓」、「水器」、「飲器」という記載がある。また、「甘瓢」や「苦瓢」という味での区別もなされ、食べていた事実もうかがえる。

さらに、中国では「ヒョウタンから天の川が生まれた」ことや西遊記では「ヒ

ヨウタンが鬼を吸い込んだ」(どちらもくびれのあるセンナリヒョウタン型)という伝承が残っており、詩経にも「瓜」と詠まれている。また、韓国では高句麗の始祖がヒョウタンから生まれたことや、日本では中世の宇治拾遺物語中にも杓にしようとして干していたひさご(瓢)から白米が溢れ出てきたという記述もある。

このことから、ヒョウタンは日常生活のなかにおいても重要な役割をもち、同時に神聖な道具であったことも伺える。特に、東アジアのどの国においても、ヒョウタンから何かが出てくる、産まれるという伝承が多く見られる。近世では、品種によって食用、酒器、杓、薬味差し、薬入れ等に使い分けされていたこともわかっている(雍州府史 1686, 和漢三才園會 1712)。その一方で鯰絵や浮世絵中にセンナリヒョウタンが描かれるなど、歴史を追ってみても、生活文化のなかに自然に取り込まれているだけでなく、とても身近な植物として親しまれてきたことが伺える。

現在の日本ではセンナリヒョウタンがみやげ物として売られたり、ユウガオが干瓢の原料として栽培されたり、多くの人がヒョウタンを日常的に利用することは少なく、目にする機会も多いとは言えない。

しかし、韓国ではヒョウタンが伝統酒マッコリを飲む際に容器としたり、また丸型ユウガオの果肉をスープの具材にしたりと日本に比べて日常目にする機会が多々ある。

歴史上、ヒョウタンの利用史は精神面でも生活面でも重要であり、考古学資料からさらに生活文化とのかかわりを読み解く必要性がある。

藤下は、ヒョウタンの果実は容器に利用する例が多く、日本や韓国でみられる食用は世界的にみても東南アジア、東アジアに限られており、珍しいとしている(藤下 1980)。実際に日本の遺跡で発見された事例からも「杓」とされていたり、完全な果実だったりすることが多く、食用の可能性が述べられている例はほとんどない。

そういったことから葛梅里遺跡から出土したヒョウタン遺体をみると、以下のことが言える。完形の果実が無く細かい破片が多く出土したことや、割られたモモやクルミの核、クリやハシバミの破片と共伴したことを考慮すると、食用の可能性が高いといえるが、一方で漆塗り加工がみられる破片もあったた

め容器として加工されていた個体もあった。そのため、胎座部分を剥り貫き廃棄したため大量の種子が埋積することになった。時代的にみても穀物栽培が定着していたことから、このように大量のヒョウタンを利用する意味を考えなければならない。

ヒョウタンは古代から人とかかわってきた植物の代表例といえる。今後、同様の産状が確認された遺跡の資料の蓄積がされ、民俗例とあわせることによって、ヒョウタンの利用史や精神世界とのかかわりが明らかになっていくと思われる。

モモ *Amygdalus persica*

モモの原産地は、ドゥ・カンドルが中国であると提唱する以前は、ペルシアからヨーロッパにもたらされた植物と考えられていた。ドゥ・カンドルがモモの野生種が中国の黄河上流域にあることを突き止め、また中国の古い文献にモモに関する記述があったこともあり、今日ではドゥ・カンドルの説が通説となっている。モモの栽培に関しては、紀元前 10 世紀から 6 世紀ころまでの詩を孔子が編纂した「詩経」でその件が詠われている。

韓国では無文土器時代後期(日本の弥生時代中期)の遺跡から出土が確認されているが、出土例の報告が少ない。

日本では縄文時代の遺跡からも見つかっている数例以外は、弥生時代から古代の遺跡において発見されている。弥生時代以降の特に大量にまとまって出土しているのは前項で挙げた更埴条里遺跡や長屋王邸宅などの古代の都、都城関連の遺跡であり、しばしばモモの核が焦げて発見されることもある。

モモの実は、古代中国で不老不死の実である仙果と呼ばれ、また辟邪の実として神聖視されていた。また、核を火にくべてその割れ方で吉兆を占うこともあり、祭祀植物として利用されていたこともわかっている。

古代のモモの形態と品種については、金原正明がその大きさや表面構造からタイプ分けをしているが、古代から現在の栽培種は品種改良が繰り返されており、品種の特定やその変遷を追うことは難しい(金原 1996)。

今後は、モモの利用がどのように行われてきたかということを、発掘現場での

産状を捉えまたは再検討することによって、資料の蓄積を行っていく。

第7章．総括

7-1．本研究の成果

本研究の成果は、韓国において、これまでに類を見ないほどの量の種実遺体を整理し検討したことで、古代の植物利用の一端が明らかになったことである。

また、葛梅里遺跡の種実遺体を分析し保存したことで、今後、韓国で発掘調査時に取り上げられる植物遺体資料の保存や提示などの重要性を訴えていけると考えている。

7-2．今後の課題

今後の課題は、目的にかなった分析ができるよう形態学的な知識とスキルを体得していく一方で、日本の弥生時代以降に渡来し、日本列島各地へ伝播、波及した栽培植物の利用実態と、現在までの植物文化史を解明することである。

そのためには、すでに報告されている遺跡の出土遺物の再検討も視野に入れ、重要とされながらも未報告となっている遺跡の資料などを中心に、分析をおこなっていく必要がある。

謝辞

社会文化環境学専攻に辻研究室の修士 1 期生として入学し、自分の身の程も知らない生意気な私に対して、常に見捨てることなく手を差し伸べてくださった辻誠一郎先生には、感謝の気持ちでいっぱいです。また、佐藤宏之先生、鬼頭秀一先生にも的確なアドバイスをいただき、ありがとうございました。

今回の研究の資料を全面的に提供してくださり、韓国滞在中に大変お世話になった、高麗大学校考古環境研究所所長の李弘鐘先生、そして私の不躰な質問や色々な相談に対しても断ることなく優しく応じてくださった同研究所の庄田慎哉氏にも深く御礼申し上げます。お二人がいなければ、このような研究はできませんでした。

また、葛梅里遺跡の動物遺体の同定をおこない、私にも有益な情報とアドバイスを提供してくださった早稲田大学の樋泉岳二先生、そして我が研究室で花粉分析を行い、韓国語の指導や翻訳を手伝ってくれた安昭炫さんにも重ねて御礼申し上げます。

昨年は本郷に仮住まい状態であったために、顕微鏡や標本などを拝見させていただき、さらにご指導を賜った国立歴史民俗博物館の辻圭子氏に感謝を申し上げます。

2 年目からの柏生活では、予行演習などでアドバイスをくださった文系院生室諸氏、また辻研究室諸氏には文献の提供などでお世話になりました。

最後に 2 年間二人三脚で歩んできた同期の小石澤泰子に感謝の意を表し、末筆とさせていただきます。

引用・参考文献

- 井口樹生，1990，古典の中の植物誌，三省堂選書，三省堂
- 岡崎敬，日本における初期鉄製品の問題，考古学雑誌 42－1
- 石川忠久著・福本郁子編，2002，新書漢文大系 15，詩経，明治書院
- 江坂輝彌，渡来植物からみた縄文時代の地域性，地理 第二十六卷第九号，古今書院
- 王秀文 2003，桃の民俗誌，盟友書店
- 小畑弘己，2004，
- 小畑弘己，2004，東北アジアの植物性食糧，先史・古代東アジア出土の植物遺存体(2)p8－15，先史・古代九州出土植物遺存体に関する実証的研究，課題番号 13551006，平成 13 年度～15 年度日本学術振興会科学研究費補助金研究成果報告書
- 金原正明，1996，古代モモの形態，考古学ジャーナル 409，ニューサイエンス社
- 金原正明，1998，便所遺構から探る古代人の食生活，ヴェスタ 31p11-18
- 金原正明，1999，古代遺跡にみる植物・トイレ文化，エコソフィア 3p71-79
- 桐本東太，2004，中国古代の民俗と文化，刀水書房
- 熊谷治，1986，ヒョウタン文化の系譜，日本人の原風景 3 さと，旺文社
- 甲元眞之，1986，弥生人の食料，季刊考古学 14 号，雄山閣
- 甲元眞之，2004，日本の初期農耕文化と社会，同成社
- 粉川昭平，1971，藤原宮出土の植物種子について
- 粉川昭平，1971，池上遺跡出土の植物種子類について，昭和 46 年度第 2 阪和国道内遺跡発掘調査報告書 4，p57 - 64
- 粉川昭平，1973，瓜生堂遺跡出土の植物種子類について，瓜生堂遺跡Ⅱ，p73－75，瓜生堂遺跡調査会
- 粉川昭平，1973，種子・果実などの遺物の調査，考古学と自然科学 6 p69－

粉川昭平，1976，板付遺跡出土の種子について，板付一市営住宅建設にともなう発掘調査報告書，1971～1974，福岡市教育委員会埋蔵文化財調査報告書第 35 集，p89-104

粉川昭平，1979，平城宮跡第 99 次発掘調査種子分析，平城宮整備調査報告書 I，p92-93

粉川昭平，1982，縄文人の主な植物食糧，季刊考古 1，

粉川昭平，1990，三木茂先生の研究とメタセコイアの発見，植生史研究，第 5 号

後藤直，2004，東アジア先史時代における生業の地域間比較研究，課題番号 12410104，平成 12 年度～15 年度，科学研究費補助金研究成果報告書

佐藤信編，2002，日本の時代史 4，律令国家と天平文化，吉川弘文館

白川静，1970，詩経，中公新書

杉原荘介，1968，登呂遺跡水田址の復原，案山子 2

関根真隆，1969，奈良朝食生活の研究，吉川弘文館

菅洋 2004，ものと人間の文化史 119，有用植物，法政大学出版局

田中義昭，1986，弥生時代以降の食料生産，岩波講座日本考古学 3 生産と流通，岩波書店

寺沢薫・寺沢知子，1981，弥生時代の植物質食糧の基礎的研究－初期農耕社会研究の前提として－，橿原考古学研究所紀陽，古文化論攻，橿原考古学研究所

辻誠一郎，2000，考古学と植物学，同成社

辻誠一郎，2003，更埴産ヒョウタン遺体，国立歴史民俗博物館研究報告，国立歴史民俗博物館研究報告

辻誠一郎・辻圭子・鈴木茂，2005，植物遺体群からみた原の辻遺跡の植生と人間・植物関係史，長崎県文化財発掘調査報告書第 30 集「壱岐原の辻遺跡 総集編 I」

辻誠一郎，2006，古代史の環境，古代史の流れ p304－337

ドゥ・カンドル・加茂儀一(訳)，1958，栽培植物の起原(中)，岩波書店

中尾篤志, 2003

中尾篤志, 2004, 長崎県原の辻遺跡の植物種子, 先史・古代東アジア出土の植物遺存体(2)p8-15, 先史・古代九州出土植物遺存体に関する実証的研究, 課題番号 13551006, 平成 13 年度～15 年度日本学術振興会科学研究費補助金研究成果報告書

中尾佐助, 1966, 栽培植物と農耕の起原, 岩波書店

中尾佐助, 1969, ニジェールからナイルへ, 講談社

中尾佐助, 1976, 栽培植物の世界, 中央公論社

中野美代子, 1991, ヒョウタン漫遊録, 記憶の中の地誌, 朝日選書 425, 朝日新聞社

中野美代子, 1999, ククルビタの旅ーことばに内在するひょうたん, FRONT, NOVEMBER, 1999 財団法人リバーフロント整備センター

中村陽一, 2002, 作物の起源を探る 8, 食の科学 No.293, 2002 年 7 月号 光琳

奈良県教育委員会, 1995, 平城京二条二坊・三条二坊発掘調査報告書

奈良国立文化財研究所, 長屋王邸出土の木簡

任東, 權, 2003, 韓日民俗文化の比較研究 岩田書店

藤下典之, 1979, 本邦各地の遺跡から出土した Cucumis, melo.の種子についてー特に遺跡の編年と種子の大きさ, 園芸学会要旨 p142-143

藤下典之, 1981, ヒョウタンの利用は縄文から, 科学朝日 41(6)p48-51, 朝日新聞社

藤下典之, 1982, 本邦各地の遺跡から出土したヒョウタンの仲間(Lagenaria siceraria)の遺体について, 近畿作物・育種談話会報第 27 号 p40-45

藤下典之, 1983, メロン仲間の系統分化と多様性, 育種学最近の進歩 24p3-21 日本育種学会

藤下典之, 1984, 出土遺体よりみたウリ科植物の種類と変遷とその利用法, 古文化財に関する保存科学と人文・自然科学ー総括報告書ー

藤下典之, 1985, Cucumis 属を中心としたウリ科植物の資源探索,その方法と

- 収集資源の活用，園芸学会シンポ講演集 p30-42，園芸学会
- 藤下典之，1990，韓国の離島で採取した雑草メロンの特性，園芸学雑誌 59 別 1p200-201，園芸学会
- 藤下典之・竹迫昭弥・土田ひろみ・南出隆久 1991 雑草メロン *Cucumis, melo.L.var.agrestis* の果実成分，園芸学雑誌 60 別 1 園芸学会
- 藤下典之，1992，出土種子からみた古代日本のメロンの仲間その種類，伝播，利用について 考古学ジャーナル 354p7-13 ニューサイエンス社
- 藤下典之，1999，更埴条里遺跡・屋代遺跡群から出土したウリ科の栽培植物 上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書 26，更埴条里遺跡・屋代遺跡群－古代 1 編－，長野県埋蔵文化財センター
- 松谷暁子，1988，電子顕微鏡で見る縄文時代の栽培植物，畑作文化の誕生 p91－117，日本放送出版局
- 南木睦彦，1986，第四紀大型植物化石研究の課題と問題点，植生史研究第 1 号 p19－28
- 南木睦彦，1989，白江梯川遺跡出土の大型植物化石，石川県埋蔵文化財センター『白江梯川遺跡』 p103－108
- 南木睦彦，低湿地遺跡の種実，考古学ジャーナル 355，ニューサイエンス社
- 南木睦彦，1994，縄文時代以降のクリ (*Castanea crenata* Sieb.et Zucc.) 果実の大型化，植生史研究第 2 巻第 1 号 p3－10
- 百原新・南木睦彦，1988，大型植物化石群のタフオノミー，植生史研究第 3 号
- 森浩一・粉川昭平・金子浩昌・安田博幸・渡辺直径，1978，座談会 3 世紀の日本列島，科学朝日 1978(2)p40-48
- 歴博国際研究会，2005，韓国の民俗学・日本の民俗学
- 湯浅浩 1979 ヒョウタンはアフリカが原産地？，科学朝日 39(8)p133-137，朝日新聞社
- 湯浅浩 1999 ヒョウタンの素顔，FRONT，NOVEMBER，1999p6-9

財団法人リバーフロント整備センター

湯浅浩 1999 文化人類ヒョウタン学 FRONT, NOVEMBER, 1999p11-14,

財団法人リバーフロント整備センター

湯浅浩, 1999, 世界のヒョウタン用具大集合, FRONT, NOVEMBER1999,
p15-18, 財団法人リバーフロント整備センター

吉崎昌一, 1992, 古代雑穀の検出, 月刊考古学ジャーナル No.355 p2-14

渡辺晃宏, 2001, 日本の歴史 04 平城京と木簡の世紀, 講談社

渡辺昭五, 1990, 歌垣の歌ー「垣」への誘い, 「記紀」歌謡の時代ー上代

渡辺誠 1973 食料生活の変遷, 古代史発掘 2

渡辺誠, 1979, 縄文時代の植物食, 雄山閣

(韓文)

池健吉・安承模, 1983, 韓半島 先史時代 出土 穀類 와 農具,

韓国 農耕文化 ー京畿大學 博物館 開館 特輯ー

高麗大学校埋蔵文化財研究所, 2004, 牙山, 葛梅里遺跡, 概報,

高麗大学校考古環境研究所, 2005, 牙山, 葛梅里遺跡, 概報 II

国立光州博物館, 1997, 光州新昌洞低湿地遺跡 I、学術●書 33

(英文)

Alexander C. Martin and William D. Barkley, 1961, Seed Identification
Manual, University of California Press

Sung-Mo Ahn, 2006, Plant Exploitation in Protohistoric South Korea – a
case study of the Sinchangdong site -, People and Plants in Prehistoric
and Historic Times of the Eastern Asia(Gathering and cultivation),
Vladivostok International Science Seminar 2006